
行灯の昼

蒲公英

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

行灯の昼

【Nコード】

N2394Y

【作者名】

蒲公英

【あらすじ】

株式会社エア・トラッド・ジャパン、よつつめのお話です。

地味で口下手、見た目も凡庸。万事につけて目立たない男の一人称のお話。フツの人たちがフツの生活の中で、ゆったりと心を通わせる話になると、いいなあ。

*R-15は保険なので、そんなシーンが出てくるかどうか、まだ未定。

「長谷部君、肩揉んでえ」

デスクの上に腕を投げ出す水元佑子、三十四歳経理部総合職。

彼女は二十七歳で一度姓が変わり、二十九歳の時に元の姓に戻った。バツイチ子ナシ、そして俺の同期だ。

俺が社内で唯一、気安く口を利く女でもある。

三十四にもなって、女と喋るのに緊張するのは、俺が慣れていないせいだ。

俺は口下手だ。ツラも女ウケしない。

二年後輩の山口みたいに、ツラも良ければ弁も立ち、上司の覚えがめでたいヤツと違うのだ。

「なんで、水元の肩を揉まなきゃなんないの？」

「長谷部君の芋虫みたいな指が、気持ちいいの」

芋虫ねえ……確かに、俺の指は太い。

「新しい派遣の子が、なかなか使えなくってえ。坂本さん、よく働いたんだけどなあ」

「ああ、なんだかパニック起こしてたって子」

水元の首から肩にかけて、揉み解してやる。

「いててっ！もつと柔らかく揉んでよう」

「力なんか入れてないぞ。血行悪いな、ババアみてえ」

「花の独身よ、私」

「まったく……祝儀、返せ」

「ああ、その節は有難う存じました。もう使っちゃったよーん」

残業の薄暗くなった社内で、経理部にも水元しか残ってない。

俺の所属する設備施工部も、もう空だ。

「およ。ラブシーンかと思ったら、長谷部さんと水元さんかあ」

開発営業部のお調子者、萩原がパーティーシヨンの隙間から顔を出した。

「あら、長谷部君と愛の語らいの最中よ。邪魔しないで」
水元が軽やかに返すのを、羨ましく聞いていた。

「長谷部さんが愛の語らいっすか。誠意ありそうっすねえ」
ほらね、俺の評価なんて、そんなもんだ。

今は山口の嫁さんになってしまっている野口さん。

彼女は入社当時、立てば芍薬とはいかなくても、タンポポよりはずいぶん美しかった。

俺より一年後に入ってきた彼女に、ずいぶんときめいたこともあった。

彼女の頭の回転の速さとか、華やかな雰囲気、気圧されて、誘うこともできなかつたけど。

あれだけ仕事ができるのに、短大卒だっただけで一般職でサポート業務しかさせない、会社のシステムってなんだかヘンだ。

俺がそう言っただけで何にも変わらないから、誰にも言わないけどね。

いつの間にか「若手の飲み会」に誘われなくなった俺は、先日一度だけ、山口と水元に誘われて、酒の席に顔を出した。

「長谷部さんが来るなんて、珍しい」

そう言っただけで歓迎してくれた後輩たちは、時間が過ぎるにしたがつて、俺の入っていけないノリの話題に移り、お開きになる頃には、気を遣った水元さんが隣に座っているだけだった。

仕方ない。喋るのは苦手だし、今風の話題にもついていけないんだから、後輩たちが悪いわけじゃない。

気を遣わせたくないから、やっぱり「若手の飲み会」は、誘われてもパスしようと思うだけだ。

「長谷部さん。設備施工部、今忙しいですか」

「また小商いの工事とか言わないよね？」

萩原の俺への問いに、隣の席が、即答する。

俺の所属する部署は、基本的にビル物件の空調設備の設計施工を行うので、店舗や住宅は扱わない。

「物件のエリアがダブってて、エリア外の工事店にやらせると、後でメンテ契約の時、揉める惧れが……」

その物件に関しては、開発営業部の津田から、先手回しのメールをもらっていた。

「そこを揉めないようにするのが、営業の手腕だろ」

「それが難しい工事店だから、頭下げに来たんですよ」

「山口に相談しろよ。得意だったろ、煙に巻くの」

「他部署だし、現場から離れちゃってるし」

俺より何年か先に入社した生田さんは、とにかく仕事を増やしたくないタイプの人だ。

工事店に仕事をまわすより、元請けが直接工事した方が利益率が高いのは知っている癖に、少し手が空いていても、利益が大きい仕事だけをメインに、小商いをしたからない。

「いいよ、個人商店だろ？予算出てるのか」

気の毒な萩原を解放してやりたくて、生田さんの言葉を遮った。

多分部内で調整しても、うまい業者が探せなくて、こっちに来たのだ。

物件は今、混んでいない。予定外の工事が一日くらい入っても、俺的にはまったく問題ないタイミングだった。

「長谷部、安請け合いですんなよ。まず申請書あげてもらわないと」

「口頭で答えてから申請書なんて、よくある流れじゃないですか。萩原、とりあえず図面送って」

嬉しそうに自分のデスクに向かう萩原の後姿に、生田さんは舌打ちした。

「他部署にどうにかしてもらおうってのが、気に食わねえんだよ。

長谷部は甘いな」

「こっちにも利益は落ちるじゃないですか。それに萩原、最近仕事にノリはじめたとこだし」

「本人の好不調で、請けたり請けなかったりすんのか、お前は」

イヤガラセのようにマウスをポンポン叩いてみせる生田さんに、とりあえず頭を下げておく。

萩原は今年に入ってから、仕事への姿勢が変わってきてるし、そういうヤツはこっちも応援したいんだけど。

「長谷部さん。萩原の無理を聞いてくれたみたいで、ありがとうございます」

一人前の中堅営業社員になった津田が、パーティションの上から顔を出した。

今でこそ萩原の指導担当だけれど、こいつもいろいろやらかしたクチだから、必ず後輩のフォローに入る。

仕事つてのは失敗してナンボだから、実はやらかしたヤツほど成長が大きい。

「津田あ。こっちの仕事増やすように指示したのは、おまえか」

生田さんが、文句言う気満々で噛み付く。

「大丈夫ですよ。俺が行きますから、生田さんには手間取らせません」

俺のとりなしがますます気に食わなかったのか、生田さんは自分のデスクの前に、どん、と座る。

「長谷部みたいなお人好しに、直接話を持ってったら、忙しくて

も請けるのわかってんだろうが。ちゃんと後輩の指導しろよ」

「いや、俺も仕事が詰まったら断りますって。大丈夫だ。行つていいよ、津田」

手を合わせる津田に合図して、場を下がらせる。

荒れ模様の生田さんの説教を聞くのは、俺だけで充分だ。

「は・せ・べ・く・ん」

給湯室でカップ麺に湯を入れてみると、後ろから水元の声がした。

「今日も残業？頑張るねえ」

「いや、これ食ったら帰るけど。家に帰っても誰も居ないし、腹減ったしな」

「生田さんに、またごちゃごちゃ言われてたね」

「仕方ないね。考え方も違うし、俺はやっぱ甘いから」
水元はくすつと笑った。

「だからみんな、長谷部君を頼りにするんだよね。人が好いのは長所だよ。じゃあ、お疲れ様ー」

給湯室から洗面所に向かった水元は、化粧でも直して帰るんだろうか。

頼りにされてると甘く見られてるのは、違うぞ。

本当は生田さんに言い返したいことは、山ほどあったんだ。

「長谷部さんって、糸川さんと飲みに行ったりしてるんですか？」
經理の派遣社員の下田さんは、なんていうかイマドキちゃんで、仕事よりもプライベート優先の雰囲気を漂わせてる。

小さな可愛い顔と、明るい色に染めた髪と、短いスカートだ。
大体ろくすっぽ口を利いたことのない俺に、何故こんな風に話しかけたかって言うと、サービス部の新人の糸川が俺に懐いてるからだ、と見当がつく程度。

利害関係がわかりやすくて、素直っちゃ素直なんだな。

「たまにはね。糸川も今、忙しいから」

「どんな話するんですかあ？今度、連れてってくださいよお」

他の男目当てに気がつかなくて、気がいたら自分が除け者になっていたことは、何度もある。

座を取り持つほどの話術は心得てないから、俺以外で盛り上がってる話を耳にしながら、ただ同じテーブルに向かつてるだけで、結構消耗する。

好意を持ちつつある女の子に、そんなことをされると、結構へこむんだな。

だけど悟りきった傍観者になるほど、俺もまだ諦めちゃいないわけさ。

三十四にもなれば、それ相応に家庭なんか持つちゃって、子供の一人二人つてのは、俺が学生の頃抱いてたイメージなんだけど、今の自分を鑑みてみれば、それはあんまりリアルな空想じゃなかったらしい。

そりゃ、彼女がいた時代はあった。

一番最近だと五年くらい前に、やけに「結婚したら」って言葉の出

る女の子がいたな。

俺がそこまで盛り上がる前に、とつと他の男を見つけて結婚しやがったけど。

「あなたは、結論が見えてるんだか見えてないんだか、わかんない」「もつとじっくり考えようよ」って言ったときの、返事だった。

つまり、結婚が見えてれば待てるけど、これから考えるんじゃない話にならんってこと、だっただけ。

山口と野口さんが、一緒に会社を出て行く。

あんまり生活の見えないカップルだけど、これから一緒にメシ作ったり、洗濯したりすんのかな。いいなあ。

ドラマみたいな恋愛や、分不相応なロマンスは、期待したくたつてできない。

ただ俺みたいな地味な男を、気に入ってくれる子がいれば、大切にしたいと思う。

実際のところ、職場以外で女の子と話すことなんてないし、職場の女の子の眼中にも、入ってないけど。

つまり、お見合いシステムみたいなところに金を落とすか、このままジジイになっていくか、なのかも知れない。

両方とも、嬉しくはない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2394y/>

行灯の昼

2011年11月17日23時36分発行